

《資 料》

「企業メセナ」と「アブレウ博士」

菅 家 正 瑞
佐 藤 正 治

1. はじめに

我々は今年度（平成18年度）から「長崎大学経済学部企業メセナ研究会」を組織し、現在まで2回の研究会を行い、メセナの実践を実験的に1回行った。今後も研究会を続行し企業メセナの理論的研究を深めると共に、企業の協力を得ながら企業メセナの具体的実践をも研究し、その成果を著作の刊行、公開講座の実施、授業などで社会に還元していく予定である。

さて、我々は企業メセナの中で特に企業による音楽活動支援に焦点を当て、企業のいわゆる「社会的貢献」(philanthropy)の中で何故に「企業メセナ」(mécénat)が採り上げられるのか、そして企業メセナの中で何故に「音楽支援活動」が重視されているのか、という根本的問題に取り組まなければならない。「音楽と人間」「音楽と社会」あるいは「音楽と企業」という企業メセナの基礎理論を究明しなければならないのである⁽¹⁾。

この極めて困難な研究の基礎的資料となりうる活動がいくつか存在する。その一つがここで紹介する、ベネズエラの経済学者であると同時に音楽活動家でもあるホセ・アントニオ・アブレウ博士 (Dr. Jose Antonio Abreu) の音楽活動である。彼の実践活動や思考は我々に、「音楽とは何か?」という根本的問題に極めて有益なヒントを与えてくれると思われる。ここに、企業メセナの基礎理論構築の資料として示す所以である⁽²⁾。

(注)

- (1) 企業とメセナの関連についての経営学的考察については、次の文献を参照されたい。
菅家正瑞『企業管理論の構造』千倉書房、平成3年、特に第1章および第6章。
同 『環境管理の成立』千倉書房、平成18年、特に第1章および第7章。
- (2) 本資料は主として佐藤がメディアに執筆した論考と収集した資料を、菅家の視点からまとめたものである。なお、佐藤は上記研究会の協力者の一人である。

2. ホセ・アントニオ・アブレウ博士の紹介と略歴

(1) アブレウ博士の簡単な紹介

アブレウ博士とはいかなる人物でどのような活動をしているのであろうか。次の新聞のコラムは博士の簡単な紹介に最適と思われるので、ここに掲載する。

① タイトル：「アブレウ博士」

ベネズエラは石油と美女の産地と言われているが、また南米一の犯罪多発国でもある。国民の80%を貧民層が占め、貧困から起こる強盗や殺人が日本の数十倍もの頻度で発生している。

「子供を犯罪から救い、善良な市民に育成し社会の発展に寄与する」。この目的を達成するための最良の手段は音楽、しかもオーケストラのクラシック音楽である、との信念から子供にオーケストラを演奏させる活動を30年前から実践しているのがホセ・アントニオ・アブレウ博士だ。かねてからその思想と実践に共感していた博士に、昨年末ベネズエラで話を聞くことができた。

全国から2歳半以上の貧しい子供たちを公募し、楽器と指導を無償で与える。音が出るようになるとチャイコフスキーの名曲などに挑戦する。現在、累計で25万人に達した参加者によるユースオーケストラは全国300ヶ所に根

付いている。

クラシック音楽に全く疎い環境に育った子供たちは、我慢強い指導者の下に練習と演奏を重ねていく中で、忍耐力、協調性、自己表現力、感受性などを身につけ、人を傷つける気持ちが失せ愛する気持ちが膨らんでいく。

「音楽は不幸を希望に変える」と言う博士は、参加者から、これまで犯罪で逮捕されたものが皆無であることに誇りを持っている。

日本で発生している青少年の犯罪に対して、犯罪者は常に存在するという前提で防犯策が論じられているが、犯罪者を作らないための根本的な政策に大きなヒントを与えてくれるのがアブレウ博士の実践であるような気がする。(佐藤正治＝梶本音楽事務所取締役)⁽¹⁾

② タイトル:「再びアブレウ博士」

この連載の初回にも取り上げたが、今一度触れたい。ベネズエラにあるアブレウ博士が創設したナショナル・ユースオーケストラ (NYO) である。

オーケストラで貧民層の子供達を善良な市民に育成する活動を30年間実践してきた博士は、彼等の才能を引き出し質の高い音楽家に育成することにも熱心だ。全国からオーディションを経て選ばれた子供達は首都カラカスに移り、NYOのメンバーとなる。ユースオーケストラを運営する財団(国が大半を出資、年間予算約10億円)が子供達の生活費を賄う。

14歳から23歳までの団員で構成されるNYOはベルリン・フィルやウィーン・フィルの団員達から定期的な指導を受け、志の高い演奏家に育っていく。幾度か欧米の演奏旅行を経験し、ヨーロッパの国際コンクールで優勝した指揮者やベルリン・フィルに最年少で入団した弦楽器奏者を輩出した。昨年カラカスでこの指揮者によるラヴェルの難曲を聴く機会があったが、実に音楽性の高い緻密な演奏をしていた。博士はユースオーケストラの概念を大きく変えたと思う。

音楽関係者が博士に注目するのは、「音楽は不幸を希望に変える」という

彼の信条が国の援助で見事に結実されているからだと思う。アバド、ラトル、ドミンゴら、共演した数多のスターも感激を隠さない。アブレウ博士をサポートしているベネズエラは世界で最も優れた音楽先進国と言えるかもしれない。音楽の犯罪抑止力に関心を持つ私も博士から多くを学びたい。

最終回にあたり、執筆の機会を与えて下さった新聞社、助言を頂いた読者の皆様や友人達、慣れない仕事を励ましてくれた妻ひろみに感謝したい。

(佐藤正治 = 梶本音楽事務所取締役)⁽²⁾

(2) アブレウ博士の略歴

次に、簡単にアブレウ博士の経歴を紹介しよう⁽³⁾。

博士は、1939年5月7日、アブレウーアンセルミ家の嫡男としてベネズエラ、トゥルヒーヨ州のヴァレラの町に生まれる。

アラ州のバルキシメート市で音楽の勉強を始める。1957年にカラカスに移り、ホセ・アンヘル・ラマス高等音楽学校に学ぶ。彼は、ベネズエラ人の名教師に師事してヴィセンテ・エミリオ・ソホに作曲を、モイセス・モレイロにピアノを、そしてエヴェンシオ・カステヤノスにオルガンとチェンバロを学んだ。1964年には助教授とマスター作曲家のタイトルを授与された。

その後、マエストロ、ゴンサロ・カステヤノス・ユマールのもとでオーケストラの指揮法を学び、ベネズエラ国内の主要なオーケストラから指揮者として招かれる。

1975年にホアン・ホセ・ランデエタ・ベネズエラ・ナショナル・ユースオーケストラを創設し、後に現在のシモン・ボリバー・シンフォニー・ベネズエラ・ユースオーケストラという世界が注目するオーケストラに発展させた。彼は自らの人生を最も勇敢に挑戦し、このオーケストラを国立ベネズエラ青少年オーケストラシステム財団 (FESNOJIV) に改組し、そのリーダーとなる。

彼はオーケストラを指揮してクラシックや現代音楽を演奏しただけでな

く、この大きな組織の社会的・音楽的ネットワークを動かす中心的人物であった。

彼は音楽の道を歩みながらも、同時にアンドレス・ベヨ・カトリック大学を卒業した後、1961年アメリカのペンシルバニア大学から石油経済学の博士号を授与され、経済学の教授活動も行った。経済学者としてのもう一つの使命を、国民経済会議（National Economic Council）の企画立案部長および顧問として果たした。1988年から1994年の間、文化大臣（Minister of State for Culture）と国民文化会議（CONAC, National Cultural Council）の会長を務め、大いなる成果と影響力をもたらした。

この二つの道で芸術と社会を掘り下げ、国民的かつラテンアメリカの良心を代表することが、敬虔なカトリック教徒であるアブレウ博士の生き方である。両親の寵愛を受けた彼は、自らの人生をベネズエラの若者達に捧げ、向上を目指している国の建設ために尽力している。

アブレウ博士は、
1998年ユネスコ平和大使、
2001年にスウェーデン政府からノーベル賞を補完する The Right Livelihood Award、
2002年イタリア政府からLife and Music Award、ボストンニューイングランド音楽院から名誉博士号、
2005年ドイツ政府から文化勲章、
2006年に世界文化賞などを受章している。

（注）

- (1) 東京新聞夕刊「放射線1」, 2006年1月10日。
- (2) 東京新聞夕刊「放射線24」(最終回), 2006年6月27日。
- (3) Cf., Chefi Borzacchini, *Venezuela Bursting with Orkestras*, Banco del Caribe 2005. pp.14~15.

3. アブレウ博士へのQ & A

ここでは、アブレウ博士の生の声を聴くために同じく2節で参照した文献からQ&Aの部分を引用する。なお、Qは著者のChefi Borzacchiniである⁽¹⁾。

(1) 先祖からの贈り物

Q：幼少の頃はどうか？誰が音楽の道に入ることに影響を与えましたか？

A：私の母が生まれたトゥルヒーヨ州にあるモンテ・カルメロには、私の祖先アンセルミ・ガルバッティ家もあり、懐かしい街です。

Q：あなたの祖先はイタリアからの移民だったのですか？

A：ガルバッティ家はイタリアのエルバ島からベネズエラに移住しました。私の母方の祖父は私が生まれる前に死んだので、彼のことは覚えていませんが、アントニオ・アンセルミ・ベルティという名前で、皆は彼をドン・トニオと呼んでいたそうです。彼の妻がドゥイリャ・ガルバッティです。彼らはエルバ島で結婚しましたが、島の反対側には港町リヴォルノがあり、オペラハウスがある重要な町でした。そのオペラハウスに祖母は定期的に通っていました。彼女は音楽を愛する心の持ち主でした。船で島に戻る際に、音楽隊が宗教行事や祭ごとや民衆の儀式で演奏するための楽器を持ち帰ったものでした。

祖父がどんな楽器を演奏したか定かではありませんが、音楽隊のことをかなり詳しく知っていたようで、私は彼が管弦楽作品を音楽隊のために編曲した作品の楽譜を手元に保管しています。

トゥルヒーヨに新しいバンドを結成し、それらの楽器を使って46人の子供のバンドが出来ました。祖父が指導したバンドは今日モンテ・カルメロ・フィルハーモニックバンドと言う名前が残っています。これは弦楽器のないユースオーケストでした。このバンドを率いて馬車で周辺の

村を演奏旅行しました。プログラムが残っており、ヴェルディやマスカーニの編曲楽譜を後に母からもらいました。

Q：母方の祖父母の家に着いたときはどんな印象でしたか？

A：完全に覚えています。それは6歳の時で、バルキシメート市に両親と一緒に住んでいました。兄弟の一人が百日ぜきで隔離された時に、母が彼女の両親の家に連れて行ったのです。そこで最初に目に留まったのは裏庭に板張りの舞台があり、祖父のトニオがシェークスピアとカスティリアの古典の作品を若い人々を集めて演じていたのです。そこには衣装やカーテンや舞台装置が入ったトランクが沢山置いてありました。すべて彼の手作りで、家にはダンテ、ペトラルカ、ボッカチオなどの胸像が飾ってありました。

モンテ・カルメロの私の家に戻ったときに、玄関にガリバルディの旗があり、それが祖父の父親から相続されたものでした。当時の祖母のテーブルクロスは世界の高級品でした。また著者から献上された素晴らしい本が沢山ありました。

Q：アートや音楽と初めて出会ったわけですね。当時のトゥルヒーヨ州の街は文化的にはどんなでしたか？

A：農業中心の街でしたが、文化的にも優れていました。カルメン教会にはメリダ神学校出身の優れた司祭がいました。そのうちの一人がモンシニョール・キンテーロ大司教です。メリダ神学校ではグレゴリア聖歌を教えており、モンテ・カルメロの小さな教会のオルガニストはここで学びました。彼が私の礼拝堂の先生で、私はこの村で音楽と礼拝の歌を愛し始めました。

Q：6歳の時のモンテ・カルメロでの滞在と祖母と一緒に過ごしたことは人生に様々なものをもたらしましたね？

A：はい、実に様々なものを。私の祖母は膨大な音楽作品を所蔵しており、リコルディのオリジナル台本も含まれていました。彼女はヴェルディと

プッチーニのオペラをすべて暗唱しており、私をそばに座らせてオペラのイタリア語をスペイン語に訳して聞かせました。私達は何時間でも一緒に過ごし、祖母は歌うと私がそれを覚えたのです。私の勉学欲がはじまったのもここでした。私の母の姉アリーデ伯母さんが村の学校の校長をしていて、彼女から多くを学んだのです。彼女はベネズエラを愛することを教えました。このあたりの学校では自分の国の歴史を徐々に教えこんでいたのです。当時は通年に文化的な夜会が行われ、そこで詩の朗読や歌、音楽と演劇を愛する使命感が目覚めたのです。子供の芸術的な部分を助ける努力がなされました。また算数、いうなれば合理的な知識と芸術的創造的感性の間のバランスを学びました。

Q：そのあと、画期的な旅があったのですね？

A：7歳でこの村を離れてバルキシメートに戻ったときには音楽の生活と読書の習慣と舞台芸術への情熱にすっかり心を奪われてしまっていました。それでバルキシメートでは音楽を勉強する決心をして、父メルポマーネ・アブレウ・メンデスと母アイリー・アンセルミ・ガルバッティはともに私の願いを勇気付けてくれました。父はギターがとても上手で、レクイントという4つのスティール弦のギターも巧みでしたし、母は歌が素晴しかったのです。私は音楽的環境に生きていました。

(2) バルキシメート：四面に囲まれた音楽

Q：いつから楽器を学び始めようとしたのですか？

A：9歳のときです。バルキシメートにはドラリーサ・デ・メディナという優れたピアノ教師がいました。父に彼女の学校に入ることを頼んだのです。だから音楽的には好調なスタートを切ったのです。彼女は直観力のある素晴らしいピアニストであり、フランスの師匠達に師事し、ピアノを合唱やほかの音楽的訓練に楽しく演奏できるように導いてくれました。それとは別に、彼女は決して無理な課題を押し付けませんでした。それ

で子供は自分のペースで進めたのです。彼女は人気者で生徒も沢山いました。

Q：この時点であなたの性格に最も影響を与えたのはお母様ですか、それともお父様ですか？

A：両方です。それぞれが違った観点で私に影響を与えました。父は生活と仕事における人間の基本的な価値や良い行い、正直さそして時間を厳守することを教えてくれました。彼は厳格な人で、同時に子供達に愛情を注いでくれ、最高の見本を示してくれました。私の母はとても繊細で最高の喜びはピアノを弾くことでした。バルキシメートで、彼女は家に人を招く集まりを持ちました。この地域でピアノがあるのは我が家だけだったのです。

Q：1945年から1950年までの5年間の様子を教えてください。

A：当時ララ国立音楽アカデミーがバルキシメート市にありました。アカデミーの院長はラウル・ナポレオン・サンチェス・ドゥケで、ベネズエラ交響楽団で首席フルートを吹いていました。この頃に有能な外国人音楽家たちがやってきました。とりわけオラフ・イルスィンスというヴァイオリニストに私はヴァイオリンを学びました。当時12歳の私は音楽アカデミーのオーケストラに加わっていました。その頃私はマエストロ、アントニオ・カリーヨの指導のもとにベネズエラの作曲家達の音楽を勉強し始めました。カリーヨは私と家族の友人でマンドリンの名手で優れた五重奏団を組織していました。私はまたララ・フィルハーモニックオーケストラでも演奏する機会を持っており、このオーケストラはマエストロプラシド・カサスが指揮して尊敬を集めていました。このように私は4面から音楽に囲まれていたのです。マエストロ、カリーヨとは国民音楽の演奏と研究を、ドラリーサ・デ・メディナとは古典音楽を、そして音楽アカデミーではチャイコフスキー、モーツァルト、ベートーヴェンのような有名な音楽を演奏しました。ロシアから戻ったベネズエラ人の

タオルミナ・ゲヴァラが主宰する立派なバレエスクールもありました。バルキシメートの400年を記念してホアレス劇場が落成し、グランド・ガラコンサートをタオルミナ・ゲヴァラバレエとベネズエラ交響楽団が出演しました。

Q：オーケストラの演奏に取り付かれたようですね？

A：はい、その通りです。パストラ・ガニーパという私よりはるかに上手いヴァイオリニストの隣に座って弾いていました。彼女と一緒に弾くことで譜面から音楽を読み取ることが大いに助けになりました。それから音楽家になることは、オーケストラの重要な団員になることだと意識し始めたのです。

Q：音楽活動と併行して学校に通って勉強できたのですか？

A：完璧にできました。しかも熱心に。いつも新しくやりたいことを探していましたし、自分が歩んでいる人生を愛していました。はじめにラ・サールスクールに学び、それからコス・タリカ・スクールグループに進学し、そこには優れた数学の先生がいて、一見互換性がないように見える数学的科学与音楽芸術との関係が見事に調和していることを気付かせてくれたのです。

(3) 1957年：カラカスへの飛躍

Q：いつどうしてカラカスに移ったのですか？

A：1957年の暮れに私はマエストロ、ヴィンセンテ・エミリョ・ソホのもとで音楽の勉強を続けるためにカラカスに来ることに決めました。マエストロ、ホセ・アンヘル・サウセがアンヘル・ラマススクールに入学させてくれ、そこで高度な音楽の勉強を始めました。

Q：どうやって生計を立てたのですか？当時は音楽で生活は出来なかったでしょう？

A：田舎のバンドやオーケストラで演奏した音楽家は音楽で生計を立てられ

たのです。医者ほど安定はしていませんがね。自分自身で経済的な地位を切り開くべきだとわかっていました。それ故私は大学に進学し、同時に音楽の勉強も続けることに決めたのです。孤独ではありませんでした。というのもカラカスには父方と母方の親戚がたくさんカラカスに住んでおり、最初のうちは大きな助けとなりました。

サン・イグナシオスクールに入学し、ここで高校を終えました。高等音楽学校でピアノ、クラヴィコードとオルガンを、そして後にオーケストラクラスとオーケストラ指揮の勉強を始めました。卒業するとピアノ、鍵盤楽器とオルガンの教授号を、さらにその後作曲家の称号を受けました。

アンドレス・ベイヨ・カトリック大学に通っていたときに得た最初の仕事は外務省の経済政策部でした。大学の2年生の時には教職のアシスタントの仕事ももらいました。大学を卒業するとベネズエラ中央銀行の国家会計局で働き始めました。音楽の勉強を終了し、1961年には経済学者となり、主に会社経営学の分野の仕事をしました。同時に私はベネズエラ交響楽団を客演指揮し、しばしばクラヴィコードとピアノのリサイタルにも出演しました。

Q：二つの世界にいたわけですね？

A：そうです。音楽は私の精神世界のための栄養であり、経済学者としての職業は私と家族を支える手段を与えてくれました。

Q：あなたの人生のなかで私達が良く知らない部分があります。つまり国の政治舞台に係わっていることです。どのようにして政治に係わったのですか？またなぜですか？

A：私の興味はアンドレス・ベイヨ・カトリック大学にいる間に始まりました。政治に惹きつけられたのには二つの理由があります。

一つは「信仰と幸福」(Fe y Alegria)という活動を創立したホセ・マリア・ヴェラス神父とともにカティア村の貧しい隣人達のために社会奉

仕活動をした私の人生経験と信念から来たものです。あの経験はこの国の社会的現実が無視できないことを私に実感させました。

もう一つの理由は、私のキャリアが与えたイデオロギーの形成です。というのも経済的政治的な結びつきが込み入っており、今日の対立する経済的概念は政治のモデルと関係しているからです。そのため人を国の社会状況から解放することは、当時不可能でした。それゆえに政治意識が生まれましたが、特定の派閥には加わりませんでした。

Q：活発に政治活動を行なったのはいつですか？

A：特定の政党に加入していたとは思いませんが、アルトゥーロ・ウスラー・ピエトリが登場して、1961年の大統領選挙に出馬することになってからは、彼を応援することになったのです。私も彼の補佐官に選ばれ、5年間経済財政委員会の会長を務めました。議会では1965年まで活動し、それが国家とその構造の仕組みについて良きアイデアをくれました。

Q：あなたは自分を活発な政治家だと思えますか？

A：政治家としてはノーです。私のキャリアは、ベネズエラで理解されているより政治への係わりがはるかに少ないのです。自分の人格を経済学者、政治家、音楽家と分断できるとは決して思ってきませんでした。人間というものは不溶解性の単位なのです。私はしたいことをしてきました。私の国の公務のキャリアを発展させる一方で、私の将来は教育で天職を尽くすことだからです。私は人生を大学で教えることに捧げ、19年間7つの大学で教鞭をとりました。そのすべてで若い人とのコンタクトがあったのです。

Q：あなたは国内の様々な経済の潮流や多国籍の組織や企業を操縦する巧みな知識を幅広く持っている、と理解しています。この技は全てのあなたの経験から来たものですか？

A：もちろんです。私は経済のアドバイザーでした。後にプランナーとし

てコーディプラン（Cordiplan）に加わり総合企画部長となり国民経済会議のプランナーになりました。それは副大臣に相当するもので国家プランの立案の仕事を始めたのです。これはとても大切な経験でした、というのもラテンアメリカ中の非常に高度な経済のアドバイザーたちと知り合うことが出来たからです。16歳から31歳まで20年間政府のために働いたのです。おかげでわたしは国際的な組織や中南米自由貿易協会とのコンタクトを通じて新しい中南米の経済発展の特質を知ることになったのです。ベネズエラをALAC（ラテンアメリカ通商協会）に加入させる道をつけることに貢献しました。私はアンデス協定（Andean Pact）と南米大陸の経済統合の創設に参加しました。同時にこれと平行して南米間の文化的統合の話し合いが始まったのです。

(3) 真実の道

Q：70年代の話をお願いします。

A：1973年に健康に支障をきたし腹部の手術を受けました。手術後の回復が長引き1年かかりました。その期間中にわたしはアメリカの大学院に通いました。ついでに私はこの国の芸術に触れ、他国の音楽の発展やオーケストラやコーラスの活動、とりわけアメリカの音楽教育の状況を学ぶことができました。これは音楽に関するプロフェッショナルな基準を立てるために実に役に立ちました。

Q：帰国した後はどうなったのですか？

A：私が35歳になる時でした。この時これまで行ってきた全ての仕事を整理し、私が係わってきた組織や音楽と教育者の経験を一つに総合することを決めたのです。新しい組織と大きな企てを立ち上げる道具はすべて揃っていました。

Q：1974年と1975年にはベネズエラにはたった2つしかオーケストラはありませんでした。ベネズエラ交響楽協会とスイア交響楽団です。この年

に新しく多くの文化的団体が生まれました。たとえば現代美術館など。そしてサンドラ・ロドリゲスやヴィンセント・ネブラダなどの重要なアーティストがベネズエラに戻ってきました。これらは影響を与えましたか？

A：全く新しい構造をもったプロジェクトを立ち上げるにはいい風が吹いてきました。組織的でなければならないのです。オペラをシーズン中にやるとか、大学に新しくピアノ科を新設するとかではだめなのです。ベネズエラの新しい音楽教育を新しい提案で平穩に組み立てることでした。楽器の演奏の訓練を受けた多くの若者達がいいましたが、職にありつけなかったり、わずかに少数の既存の団体にしか入れなかったのです。ベネズエラ交響楽団は若者をオーケストラの練習に加入させる実験的なオーケストラを創設しました。マエストロ、ホセ・アンヘル・サウセはホアン・ホセ・ランダエテ音楽院の院長でしたが、彼はオーケストラの指揮科の充実に熱心でした。ベネズエラのどの市にもシンフォニーオーケストラとユースオーケストラを創設する時でした。

Q：この新しい音楽教育のモデルに対して既存の環境にいた音楽団体や文化団体から反対はなかったのですか？

A：組織的な変化には自然のことながら反発はありますし、それは良いことなのです。まさにこの反対層がいるからこそ、このプロジェクトの効果が判定されるのです。反対は付き物でした。反対層のおかげで我々の存在を証明し、正しいと認めさせるための歴史的な機会を持てたのです。我々は反発を歓迎しました、なぜならば反発と対決するためにそれを必要としたのです。

Q：1975年2月12日にベネズエラ全国青少年オーケストラが誕生した時のモットーは“Tocar Y Luchar”（プレイ・アンド・ファイト）でしたね。どうしてこのような行動的で挑戦的な言葉なのですか？

A：最初の反対運動が起こったその時から、我々はただ演奏していることは

できない、このプロジェクトの意義に反対する勢力との闘いから逃れることはできないとわかっていました。どうして？我々が正しいことを彼らに証明するためです。

Q：このモットーはある程度ベネズエラ・ナショナル青少年オーケストラシステムの性格と気質を合体したものです。それはまたあなたが創り上げた組織の存在のもっとも難しい側面を反映してますね？

A：その通りです。まず第一にこの組織を全国に拡大するために必要な教師たち、教授たちそして指揮者たちを訓練することが挑戦でした。それには30年かかりました。これがわれわれの基本的な挑戦でした。

(4) ベネズエラの完璧な新局面

Q：ナショナル・ユースオーケストラの創設者たちの証言にある共通した言葉があります。信念ということばです。彼らはこう言っています：「ホセ・アントニオは巨大な記念碑のような信念を持っていた。夢は彼の頭の中にだけあるものだと考えていた。」これにあなたはどう感じました？

A：良いと思いました。単に時間の問題で、我々が正しい道を歩んでいることを証明する時が来ると考えていました。不信感をもたれる事を気にしませんでした。むしろそのような不信感を歓迎したのです。なぜなら最初の不信が後の信用に変わると、その信用は2倍大きくなるのです。そのことを私は決して神経質にならず、我々がしっかりとした地面に立っていることをはっきり確信したのです。

Q：スタートからあなたのプロジェクトは愛国主義的でした。それはもう1つのベネズエラを活気づかせるものです。民主的な理想、正義と社会性を包括し、芸術で子供や若者を救うこと、国民の感受性を増大させること、集団生活や自己達成のための仕事や教育、これらが音楽を取り入れた国にもたらされた価値のいくつかです。我が国のオーケストラは、私達が日常生活を過ごしているこの同じ国に徐々に影響を与えていると思

ますか？

A：オーケストラシステムはベネズエラにとってまさに正しい特性なのです。私は最初からオーケストラが国を1つにまとめる最も美しい表現方法だと見ていました。私は目標を達成するための意思とエネルギーに満ちた力強いベネズエラを見ました。疑いもなくこのオーケストラが地域社会や町や州や家族のなかに入ってきたことで、ベネズエラの変化を促してきました。重要な事は、もし芸術のほかの分野が同じ事をすれば、芸術全体が国全体を本質的戦略的かつ革命的に変えている手段となるだろうということです。

Q：この大きな社会的文化的事業のアキレス腱は何だったのでしょうか？

A：どの長期プロジェクトにあっても、アキレス腱は短期間です。このプロジェクトは長いプロジェクトを位置づけられるべきです。アキレス腱は発端に出ます。長期的な展望に現れるものは不確実性であり、決して予想できなくそして常に危険なものです。

Q：あなたのそばで仕事をしている人々は、常にあることを終える前に次のプログラムやコンサートやプロジェクトを創っているわけですね。

A：その通りです。

Q：仲間たちを押し付けずにあなたの情熱をどうやって伝えていきますか？

A：無尽蔵のエネルギーは私から出ているわけではありません。不滅の光がプロジェクトの生きている間輝いているのです。これは幾世紀にもまたがるプロジェクトなのです。歴史的なものです。その光は自らのエネルギーを放ち、子供や青少年の演奏者たちに与えるのです。彼らは消えないエネルギーを吸収し、輝き、そのエネルギーを伝達し、それを長く保つのです。

サイモン・ラトルがカラカスに到着した2日後に、シモン・ポリバーオーケストラはエステヴェスのラ・カンタータ・クリオーヤを素晴らしく演奏しました。カラボボオーケストラは10周年を迎え、アマゾナス・オー

ケストラは打楽器を待っていましたし、アンソアテギ・シンフォニーは国内と国外の演奏旅行に集中していました。どのオーケストラも目的と夢を持っているのです。想像してください。サイモン・ラトルに別れを告げて空港からカラカスに戻る途中、私はゼロに戻った気がしました。新しく宿題に取り掛かる自分がいたのです。

Q：サー・サイモン・ラトルというベルリン・フィルの指揮者の訪問はベネズエラ青少年オーケストラシステムの30周年と一致します。このシステムはこれからどこに行くのでしょうか？

A：より多くの子供や青少年に今日のベネズエラ青少年ナショナルオーケストラに参加させること。全国の子供達が自由に芸術にアクセスできるべきです。カラカスの近隣でスポーツ施設があるどの町にもコーラスとオーケストラがあることを想像してください。それはものすごいことです。この国や中南米諸国やカリブ人の全ての子供達と若者達が芸術に自由に触れることを想像してください。第三世界の偉大な歴史的な旗印として貢献するこのプログラムを想像してください。これは先進諸国にも貢献するのです。これと似た例は18世紀末にヨーロッパは産業革命によって飛躍を遂げ今日の世界の偉大な力を作り上げました。人間的かつ創造的な偉大な芸術革命を通して中南米諸国とカリブ人に奮起させる我々の番がやってきたのです。我々にはこの変化を可能にできるのです。

Q：このあなたの信条を世界中に根を張らせるには、またベネズエラで拡大するためには何が必要ですか？

A：国はこれを教育システムのための本質的なプロジェクトと受け入れなければなりません。学校の体制が基本的なカリキュラムに芸術を2歳から大学生までの全員の生徒に教える日が来れば、我が国は別の国になるでしょう。これが起こるためには、目標に向かって専念する教師をさらに訓練しなければならないでしょう。それが次のステップです。オーケストラシステムが学校で教える必須科目としてのアートと音楽の正式な教

育に入り込むことです。

Q：明日のベネズエラをどう見えますか？

A：ベネズエラは偉大な教育事業体となるに違いありません。国が原則と中身と目的を意識した、賢明で進んだ深い教育システムを持てば、この国は自ら歩むべき道を見つけるでしょう。

(4) 全てを探求し学ぶ

Q：あなたの音楽の好みを話しましょう。あなたが音楽で重きを置いているのは計算ですか、知性ですかそれとも感情ですか？

A：音楽は全てにわたって私の感情、夢、ノスタルジー、空想そしてエネルギーを目覚めさせるものです。音楽は行動と献身を喚起させます。それは今日も必要であり、子供のときから存在を発揮するために必要な発電機であり根本的なエネルギーであります。音楽なしには人生は不毛で耐えられないものになるでしょう。

Q：あなたが人生の中でつらかった時、音楽はどういう意味を持ちましたか？

A：音楽は不幸を希望に変えるのです。私の挑戦心を行動に変えます。夢を現実にさせるために実行に移す起爆剤なのです。

Q：好きな作曲家はだれですか？誰に親しみを感じますか？

A：誰でもです。人生で彼らすべてから学んできました。特定の作曲家に愛着を覚えるのは一日のスケジュールの特定の時間によって変わってきます。たとえば私が一日の終わりにとても疲れていてハードワークだった時には、他よりひきつけられる音楽があります。私が元気に起床して、時間がたっぷりあって論文の締め切りに追われていない時にはアントン・ブルックナーのシンフォニーが理想的な音楽です。就寝前にはワーグナーやラヴェル、ドビュッシーの音楽を聴くのが好きです。起きた直後はバロックが好きで、バッハは目覚めを良くしその日のスタートを用

意させてくれます。ヴィヴァルディの音楽は生命力です。モーツァルトは一日のうちでいつでも聞く事ができます。新しい本に取り掛かって書物に目を通す時には衝撃的で辛辣な現代音楽を聴くのが好きです。

Q：ロックやポップス音楽はどう思いますか？

A：当然のことながら、それは私が深く関わっている音楽のスタイルではありません。私はロックは聴きません。若者のパーティーなどで演奏されている環境のなかで聞こえてくるだけです。若者と付き合うためにロックを聴く必要はないのです。なぜならば彼らとの付き合いを私は恒常的に、スクーリングやオーケストラやコーラスの練習の課程で行っているからです。本当のことを言えばこの種の音楽との私の係わりは極小です。

その反対はベネズエラの民族音楽で、私はそれを愛し本当に楽しみます。しかもベネズエラのみならず、中南米諸国や他の全ての民族音楽が好きです。私はユネスコの世界民族音楽コレクションが大好きです。これは私の宝物のようにしばしば聞いています。また旅行中に古いレコードショップに立ち寄って20世紀の有名なアーティスト達のレコードを探し回ります。

Q：現代音楽はどうですか？

A：大好きです。音楽はいつでも喜びなのです。新しい音楽言語は新しい挑戦なのです。勉強するのに時間がかかりますが、作品を書くのに使われた音楽表記の音階を研究するのです。それを大変楽しみます。現代音楽の音階や新しい音効果やエレクトロニクスを通して音の世界が発展していくことが特集されている雑誌に寄せられる論文を読むのが好きです。これは現代物理学を探求するようで楽しい世界です。

Q：好きな料理、好きな文学作品は何ですか？

A：食べ物に関しては自国のベネズエラ料理を愛していますが、外国料理ではイタリア料理が好きです。読み物はどれも好きです。私の仕事をこなすための情報が必要だからです。芸術や音楽の本だけを読むわけではあ

りません。夜は最近の経済動向やプランニング、貿易と国際関係を併行して研究します。会議やセミナーに参加しなくてはならないので。また家でも海外でも多くの論文を書かなくてはならないのです。それとは別に我々の若い音楽家や専門的な経験を積んだ学生の中に沢山物知りが出て、彼らと交わると自分の知識を豊富にし、同時に一緒に高度な知的理解を高めることができます。

(5) 血の中にある信仰心と共に

Q：あなたは敬虔なカトリック教徒を実践していますね？

A：私はキリストの教えの謙虚な伝道者だと思っています。キリストの教え、つまりキリストが伝える理想に人生と自分の運命を探し、行動するからです。どの哲学でもその目的は人に適応力をつけることのはずです。従って哲学は魅力的な世界です。なぜなら哲学を通してキリストのメッセージを何度も発見し、それが現代の思想によって再解釈され、無限の力を得るのです。

Q：マエストロにタブーはありますか？人生のなかで何かがタブーとなりましたか？

A：知りません。私の運命にミステリーを押し付けたり、偏屈な判断はしません。

Q：あなたの人生の中で実に困った時に自分の運命を誰にそして何に託しました？

A：神にです。他に誰もいません。神こそが唯一の真実の保護であり力です。

Q：精神分析の道に入りたいと思ったことは？

A：決してありません。

Q：どうしてですか？

A：なぜならば私は祈りの力を信じているからです。ただ言葉に出した祈りだけでなくどんな祈りでもいいのです。私の仕事は祈ることです。信念

と全ての努力と能力を傾けた仕事に自分を捧げること、それが祈ることなのです。真実の奉仕であるならば、神との関係は永久であり遮られないものです。そうでなければ神への見せかけの奉仕となります。神への奉仕を目的のない存在の無政府的な不規則性に向けることは全く意味のないことです。人の献身は全的で正しくなければなりません。それは奉仕を神に帰依すること、自己を神と統合しあらゆる生活と統合することです。それによって思想が失われることはなく自己喪失になったり社会から疎外されることはないのです。

Q：独身でいらして家庭を持たないのはなぜですか？

A：私は自分を教師だと考え、自分の学生に責任があり、それに私のエネルギーと人生を捧げてきたのです。これが聖職者であり続けている理由で、聖職者としての生活があり、何が起こっても我々は本質的にイエス・キリストに深く仕える身なのです。カソリックを着るの重要ではありません。本質的な事は聖職者として生活して全面的な献身の精神で、聖職者、イエス・キリストの敬虔な召使でいることが光栄だと思えることです。

Q：あなたは神の使徒と感じますか？

A：そうは望みません。むしろ理想を求める高貴なそして不屈の精神を持った神の召使を望みます。この人生で最も大きな喜びは音楽家としても生きていることです。なぜなら音楽の世界は神の本質に近く、根本的な美しい言葉に尽くせない方法で神を反映する芸術の魂の中で神を奉仕できることは、人生の幸福なのです。

Q：今までの人生で失敗を感じたことは？

A：生まれつきの弱点、不完全、間違いは誰にも付き物です。沢山の間違いを犯しています。

Q：何か上手く行かない時や間違いを犯したときはどうしますか？

A：自分の誤りを最初に気がつくと、すぐに改良しようと決心します。いつ

までもです。

Q：何が一番嫌いですか？他人に我慢できないのは何ですか？

A：虚偽と不誠実です。人が仕事に見えないところで偽装や隠蔽をはたらくと、本当の自分を隠している、そして自分の責任を果たそうとしないと思います。これは痛ましいことです。

Q：あなたは生涯の任務を果たしたと思っていますか？

A：「任務完了」という言葉は決して言えないでしょう。私には生涯にわたる使命があります。だから私には任務は何も完了していません。私の任務は永久に続きます、神の意思が下されるまで。

Q：あなたの将来をどう予想していますか？

A：私の将来は神の手にあります。思い悩むことはありません。

Q：死をもですか？

A：もちろん、悩んでいません。

(注)

(1) Cf., Chefi Borzacchini, *Venezuela Bursting with Orkestras*, Banco del Caribe 2005, p.17, pp.19-23, pp.25-29.

5. ドキュメンタリー番組におけるアブレウ博士の発言

次に紹介するのは、テレビ番組で述べられたアブレウ博士の発言である。

(1) アメリカ CBS テレビ「60minutes」⁽¹⁾

音楽は子供たちが自分を表現する手段なんです。

コミュニケーションの基本手段。

その価値は計り知れません。

——オーケストラは何人でスタートしたんですか？

最初のリハーサルには11人しかいませんでした。

2度目のリハーサルは25人，3度目が46人で4度目は75人。

——いまや11万人の子供が参加していますね？（注：放送時点で11万人，2005年末で25万人）

私たちの目標はずっと大きいんですよ，あらゆる子供に音楽に接してもらいたいんです。

オーケストラの真髄は協調の精神にあります。

チームワークと厳しい訓練を必要とするものです。

そうした要素が音楽だけじゃなく，子供の成長にもいい影響を与えるんですよ。

——目標は優秀な音楽家を育てることですか？それともよりよい市民を育てることですか？

両方です。良い音楽家を育てれば，よい市民にもなります。

——あなたはよく子供を救うといいますが，子供たちを何から救いたいですか？

私は身体障害児や，孤児や，見捨てられた子供や，少年院に収容された子供たちを救いたいです。

——オーケストラは社会を変える手段だとあなたはおっしゃいますが，この街（カラカス）は変わりましたか？

子供たちは目標に向かってがんばり，家族も応援するようになりました。

このオーケストラは町の魂，町の精神です。

世界の少年少女オーケストラを作ってみたいんですよ。

——明日は世界のオーケストラを？

ええ，そうです。

(2) ベネズエラ Alberto Arvelo 制作 “Tocar Y Luchar” (「演奏せよ、そして闘え」)⁽²⁾

楽器を演奏して音楽のハーモニーを生み出すことで美を創造できる者は本質的なハーモニーが何であるかをつまり人間の調和をわかりはじめるのです。

啓示というものが人間の精神の中から変化し、昇華し、発展するものであることを人に伝えられるのが音楽である。

オーケストラとは共同体です。それ自体の中に合意という基本的な目標を持った本質的な唯一の特徴がある共同体なのです。それゆえにオーケストラに従事する人は合意の経験を持って生きていきます。

合意の経験を違う言葉で言うと、チームで実行することです。お互いに依存し合うグループの行動では、誰もが他の人々に対して責任があり、他の人々は自分に責任があるのです。

何に合意するのですか？

美しさを創造することにです。

明らかに音楽は社会を向上させる構成要素として高度な意味での社会発展の代理人として認識されなければなりません。なぜならオーケストラは結束の調和やお互いへの思いやり、そして社会全体が一緒になって素晴らしい感情を表現する能力という最も優れた社会的価値を伝達するのです。

これが全ての中南米諸国に伝達し、ベネズエラはこの事業を大陸全体と分かち合うのです。

我々はこの大陸の社会の歴史を根本的に変えていくのです。

ばらばらの集合体をまとまった国に変えることができるのは、芸術文化であり、文学であり、優れた哲学的思想であり、宗教と芸術を通した精神性なのです。

だから我々は未曾有の企てに直面しているのです。

数回のコンサートを提供するだけでは芸術的な発展を遂げるプランとは言

えません。

オーケストラは聞いている聴衆を変えるだけではありません。聴衆を変える前にオーケストラ自体が変わってしまうのです。

もともと芸術は少数の芸術家による少数の人々のためにあったが、それが少数の芸術家による多数の人々のためのものになりました。今、我々は芸術が多数の芸術家による多数の人々のためのものにする新しい時代を作り始めています。

ハイデッカーはこう言っています。人生とは海で泳ぐ人が何も無い海で溺れないために未来を掴み続けるようなものだ、と。このようにすべての現在はすでに来ている未来であり、未来はそこにあるのです。

リズムとは音楽の現象ではなく、精神の現象です。リズムは魂の内部の鼓動であり、音楽がやることはそれを昇華させることです。

魂の中の鼓動を昇華させ、それを調和に満ちた繊細な方法、目に見えない変わり方で他の人間に表現することです。

様々な気持ちを合意させる芸術、魂、メッセージと価値を創り上げる精神、子供と若い大人の精神を深く変えていく最高の価値、これらがオーケストラです。

オーケストラは一つの啓示です。神は合理性だけでは説明できないもの、直観力でしか浸透できない何か言葉で言い表されぬものを啓示してくれます。音楽の衝動とオーケストラの使命に燃えた若者は心理的な変化をはじめます。

音楽や造形芸術、文学、映画を通して我々を1つにする芸術に自らを満たされなければなりません。

芸術を通して自己を本質的に認識し始めなければなりません。芸術は存在の真の啓示を見つけ出すことが出来る唯一の世界なのです。本物の存在は美の使いとしての芸術を通して明らかになるのです。

将来のベネズエラはどんな小さな町にも合唱団とオーケストラがあり、そ

のようなどこの町にも合唱団とオーケストラを備えた国となるでしょう。この前衛的な文化は想像できないほどですが、22世紀や23世紀まで待つ将来ではありません。

(注)

- (1) アメリカCBSテレビ「60 minutes」2000年11月19日放送（なおこの番組は日本でTBSテレビが2001年1月21日の深夜に放送している）。
- (2) ベネズエラ Alberto Arvelo 制作（2005年）のドキュメンタリー映画“Tocar Y Luchar”（「演奏せよ、そして闘え」）。

5. アブレウ博士と音楽に対する見解

ここで、アブレウ博士に対する筆者（佐藤）の見解を述べてみたい。

(1) 博士の思想と信念

アブレウ博士については、海外での受賞歴や、クラウディオ・アバド（指揮者）、サイモン・ラトル（指揮者）、プラシド・ドミンゴ（歌手）、マルタ・アルゲリッチ（ピアニスト）をはじめとする音楽関係者や欧米の政治家や文化人に、その思想と実践が注目されている。しかしながら日本ではアブレウ博士の存在がほとんど知られていない。

2005年の世界文化賞を受賞するために来日したマルタ・アルゲリッチが音楽記者向けに行った会見でアブレウ博士の活動を熱心に説明したところ、記者達のあまりの無関心ぶりに同席した筆者は驚いた。

筆者は2005年12月にベネズエラのカラカスを訪れ、アブレウ博士や関係者と懇談した。ヨーロッパから来日した演奏家の数人に「ベネズエラに行く」と言うと即座に「ユース・オーケストラのためでしょ。」という答えが返ってきた。しかし、ベネズエラとオーケストラを関連付ける日本の音楽関係者

は皆無に近い。筆者のカラカス訪問の前後には、アメリカ合衆国とドイツ連邦共和国の文化行政担当者がカラカスに視察に来た。日本が多くを学び、吸収してきた西洋音楽の先進国が、新しい音楽文化のあり方を南米のベネズエラに学びに来ているのである。

筆者が初めてアブレウ博士を知ったのは、米 CBS テレビ「60 Minutes」を日本の TBS テレビが放送した2001年の1月である。音楽の力を一流演奏家によるアウトリーチという活動に託して社会の健全化を図りたいと願い、後述の「Music Against Crime」というコンセプトを作成し、2000年からささやかな活動を始めていた筆者にとって、アブレウ博士がはるか以前から組織的な社会活動を行なっていることを知り、大きな刺激を受けた。

今回の資料にはアブレウ博士の生の声を出来るだけ紹介することで、彼の思想信条を第三者のフィルターを通さずに眺めていただくように務めた。

子供や青少年が誰でも無料で楽器や指導を受けることが出来るオーケストラの組織体を全国に拡大し、オーケストラ活動から学び取る協調性・忍耐・責任・調和・合意を通じて子供達は善良な市民に育ち、社会発展の礎を築く。それが社会変革の原動力となる。そして音楽にはそのような力が内在している。博士の趣旨は明快である。

筆者の解釈で言えば、音楽の世界に入った人間が、まだその世界に入っていない人間を組織的に音楽の世界に誘うことによって社会は変わるに違いない、という信念の実践を行っているのがアブレウ博士である。2000年の統計でユースオーケストラに加入している総数は、子供達の活動を支えている家族を含めて22万人、それが2005年には50万人に増えている。この割合で増えていくと、人口2,600万人のベネズエラはあと23年後の2029年には全国民がユースオーケストラのメンバーとそれを支える家族、という計算になる。

(大人になったメンバーのほとんどが、そのままユースオーケストラの指導者やスタッフとしてオーケストラに残る、という驚くべき証言を博士から聞いている。)

企業メセナを考察する上でアブレウ博士の思想と実践は、「メセナは何のためにあるか？そしてメセナの行き着く先はどこか？」という問いに多くのヒントを与えていると思う。文化芸術の支援活動としてのメセナ活動が「社会の発展と向上」を見据えたものでなければ、メセナの価値は見せかけのものになってしまうだろう。

(2) 音楽とは何だろうか？

最後に「音楽」に対する佐藤の見解を述べて、本資料を終えることとする。

① 音楽を必要としているひとに音楽は届いているだろうか？

「聴衆の拡大」のテーマを掘り下げていくと、この問いに真剣にとり組まなければなりません。コンサートホールやレコード店に足を運ぶ人々を増やすことだけで、聴衆拡大の問題を解決したことになると考えていないだろうか？このような人々は一度音楽の楽しみを味わえば、その後何度でもホールやレコード店に来てくれる言わばリピーターとなりうるのです。このようなコアの聴衆とは別の、未来の聴衆を創り出すことを私たちは考えなくてはなりません。音楽を本当に必要としているひととは、著者の考えによれば、音楽なんか自分の人生に関係がない、だから音楽なんて要らない、だから音楽を聴くためにコンサートホールやレコード店に行くことなんか考えもしない、というひとびとです。そして著者はこういう人々を若い世代の中に見出します。

無気力・無関心・無感動・すぐ切れる・コミュニケーションが苦手・いじめ・不登校、学級崩壊…などの言葉で説明されている青少年達の行動。それが行きついた校内暴力は、生徒が生徒を、生徒が教師を殺傷する事件に発展しています。このような事件に登場してくる若者たちにこそ、音楽が届けられなくてはならない、と著者は感じるのです。

② Music Against Crime……………傷つけることを萎えさせ、愛することを助長する音楽

私たちが取り扱っている音楽，とりわけクラシック音楽のもつ美しさ，優しさ，力強さ，我慢強さ，言いかえれば音楽のもつ愛に，このような若者達がたとえ一瞬でも触れていれば，他人を傷つける気持ちがなえてしまうはずだ，という信念を持つことからはじまります。

一年半ほど前に栃木県黒磯市の中学校で起こった，生徒が教師を刺し殺した事件に著者は驚き，悲しみました。現場を司っている校長先生の説明によれば，この生徒には事件をひきおこす理由が見当たらなかった，と報道されています。教育を受けた両親のもとで経済的にも恵まれた家庭に育ったこの生徒が殺人まで犯す行動を事前に察知できなかった，したがってこの事件は防げなかったというものです。著者はこの発言を言いかえれば，この種の事件が全国の学校にいつ起こっても不思議ではないということで，実際に学校での傷害事件はこの事件の前後にもたびたび起こっています。これは悲しいことです。しかし著者がいっそう悲しかったのは，生徒達にナイフを学校に持ってくるなと呼びかけることで問題を解決しようとした大人たち（文部大臣の異例の呼びかけをも含む）の対応でした。ひとを傷つける気持ちや心をなくすために，言いかえればひとを愛する気持ちや心を持たせるために，大人たちがなにをすべきかを真剣に議論をしたのかどうか？「北風と太陽」の物語を借りてたとえるならば，ナイフという外套を身につけた少年に強風を吹かせて外套を脱がせるやり方だけが論じられ，太陽を登場させる案が見えてこないのです。「栃木県黒磯市の中学校」を「アメリカ各地の学校」，「ナイフ」を「銃」に置き換えると，今世界の若者に起こっているこの問題は一層深刻です。

ここで，音楽を生業としている著者たちの出番がきたと考えます。

③ 具体的にどうやるのか？

一口で言えば、若者たちの集う学校などにアーティストが直接音楽を届けに行くという作業（アウトリーチ）を、私たちが全面的に支援するというものです。音楽鑑賞というこれまでの学校のカリキュラムに加わるものではなく、別の枠で新たに若者たちと音楽との出会いを創り出すことが必要です。大半の若者たちが、生きるうえで音楽を必要なものだとはまだ気がついていないわけですから、音楽を届けようとする行為は無報酬でなされます。またこの行為はおもにアーティストの生演奏が中心となりますが、レコードやビデオなどの音楽ソフトも大事な役割を果たします。若者たちが音楽に本当に出会うかどうかは、そこでプレゼントされている演奏の質で決まりますから、演奏家は真剣勝負で臨まなければなりません。ここでは演奏する側にとっても聴き手にとっても「インパクト」を共有することが何よりも求められます。またこの機会を演奏家の側からパブリシティやプロモーションのために利用してはなりません。

「音楽とは何か？音楽とは愛である。愛とは何か？愛とは分かち合うことである。」という姿勢を貫かなければ、若者たちは心の扉をあけてくれません。また Music Against Crime という言葉は、心の中で叫ばれるべきスローガンですから、作業の現場で使ってはなりません。最近のアウトリーチ活動から現場で若者が「音楽」を発見した事例が報道されていますが、このような作業に加わるアーティストは「音楽を発見したばかりの新しい聴衆」を発見することになります。同時に「音楽は何のためにあるのか？」という根本的な問題を意識することで、プロフェッショナルな活動舞台での演奏スピリットが著しく向上します。2000年から2003年の間に3度に渡ってアウトリーチ活動を行い、小学校生と交流してきたピアニスト、マルタ・アルゲリッチは「子供達からたくさんのビタミンをもらった」と述べています。

このような作業に、著者たちとアーティスト達（邦人・外来を問わず）が、これまでの活動の10パーセントをささげることで、5年後・10年後の日本の社会は確実に希望の持てるものになっていく、と私は信じます。

美しい音楽を感じるということは、この世の中にまだ希望が残っていることを実感することであり、ひとを傷つける気持ちがひとを愛する気持ちに変わっていくことです。このことに気がついた私たちおとなが若者たちに働きかけることは、おとなの責任なのです。

音楽に「癒し」の効果を超えて犯罪を減らす力が宿っていることを直感した私たちが、想像力と忍耐を駆使してこの作業に取り組み、その成果がはっきりと見えたときに人々は、そして社会は私たちのかかわっているこのクラシック音楽をどう評価するのでしょうか？これまで単なる嗜好品のひとつとして扱われてきたクラシック音楽なるものが、ひとが生きていく上でもっとも大切な「心の必需品」として尊敬される日がやってくることを、著者は確信しています。想像力は創造力になりえることを確認したいのです。Music Against Crime というスローガンはいつのまにか Music For Love というスローガンに変わっていくでしょう。そしてこの Music とならんで音楽と同様にこの力を本源的に備えている他の芸術分野がスローガンに加わっていくことを、著者は想像しています。

以上申し上げた作業がすでに何人かの手で地道におこなわれていることを著者は知っています。あるいは先ごろ亡くなった偉大なアーティスト、ユーディ・メニューインの思想を継承することになるのかもしれませんが。

しかし著者たちのような音楽事業の主体そのものが、この作業に真正面から取り組むことに大きな意味がある、と著者は考えます。

そしてこの作業を社会の隅々まで広げていくために、演奏家や作曲家、音楽評論家、ジャーナリストの集まりはもとより、いわゆるジャンルの異なる音楽とも連帯し、舞踊・演劇・美術・文学・映画・音楽療法・スポーツ・心理学者・社会学者・弁護士・医師・教育者・学校・病院…などのグループと横の緩やかなネットワークを結ぶこと、そして国外にまでその輪を広げていくことが必要となってくるに違いありません。

以上